研究報告

保育所における地域活動“体験隊”をドキュメンテーションすることの評価

北原　理恵[1)]　齊藤　勇紀[2)]　中野　啓明[2)]　浅田　剛正[2)]

1）豊丘村立豊丘村保育園
2）新潟青陵大学福祉心理学部社会福祉学科

Early childhood care and education: Evaluating the documentation of the “expeditionary party,” a community activity, at a daycare center

Rie Kitahara[1)]　Yuki Saito[2)]　Hiroaki Nakano[2)]　Takamasa Asada[2)]

1) TOYOOKA VILLAGE TOYOOKA VILLAGE DAY-CARE CENTER
2) NIIGATA SEIRYO UNIVERSITY, FACULTY OF SOCIAL WELFARE AND PSYCHOLOGY, DEPARTMENT OF SOCIAL WELFARE

要旨

本研究では、ドキュメンテーションによる可視化された体験隊活動を保護者と共有する効果とそれによる保育実践上の意義を検証した。

保護者から得られた自由記述の回答データをKH Coderで分析を行った。その結果、「コミュニケーションの促進と豊丘村の再発見」「豊かな自然への関心」「園独自の経験」「地域資源の認識」「有意義な体験」「生活の様子と保育内容の理解」の６つのカテゴリーが抽出された。

本実践におけるドキュメンテーションによる活動内容の伝達は、子育て支援に寄与するものであった。また、子どもと保護者のニーズを反映した保育活動であり、ねらいに即した保育内容であった。保育におけるドキュメンテーション活用は、保育者間、保育者と保護者間の視覚的体験共有を促進し、開かれた地域保育への展開につながることが示唆された。

今後は、地域特性を考慮した検証、さらなる活用の可能性、相互的な保育実践による質の向上が求められる。

キーワード

ドキュメンテーション、保育記録、保育の可視化、子育て支援

Abstract

This study examined the effectiveness of using documentation to share visualized experiential team activities with parents and the significance of this method in early childhood education and care practice.

Data from an open-ended survey of parents were analyzed using KH Coder, and different categories were extracted; these included “promotion of communication and rediscovery of Toyooka Village,” “interest in the richness of nature,” “interest in the school’s own experience,” “recognition of community resources,” “meaningful experiences,” and “understanding life and childcare content.” The study results revealed that documenting this practice contributed to parental support for childcare; moreover, the use of documentation in early childhood education and care is an important element in the sharing of visual experiences among caregivers and between caregivers and parents. The study results also suggested that this practice promoted the development of nursery teachers in the region and led to greater openness between teachers and parents. Future research should consider regional characteristics and requirements for quality improvement through mutual early childhood education and care practices.

Key words

documentation, documents and records in preschool education, Visualization of preschool education, child care support for families

Ⅰ　問題と目的

就学前の教育・保育現場では、実践の質の向上が求められている。子どもの育ちの喜びを保護者や地域の人々と共有する「見える化」と「共有」は、現在の保育の見直しと質向上への取り組みのキーワードとして挙げられている[1)]。このような子どもの活動を可視化する方法の一つとして、イタリア北部のレッジョ・エミリア市の幼児教育で活用されているドキュメンテーションがある[2)]。

レッジョ・エミリアにおけるドキュメンテーションは、子どもと大人が教え合い、学び合うために用いる可視化された資料、証明、資源であり、子どもをより深く表し、理解しようという意思表示とその具現化であるとされている[3)]。

ドキュメンテーションは、積極的に写真を用いることで、保育者だけが活用するのではなく、子どもや保護者、そして地域の人々にも保育を広く開き、豊かな保育実践を作り上げていくための大事なツールとなっている[4)]。秋田[5)]は、ドキュメンテーションの意義について「まさにその子がその子としての有能さを発揮している瞬間を驚きや喜びと共に保育者が捉え、その意味を価値づけることが次の教育への問いを生むとし、終わった過去の記録やアルバムではなく、次の教育を生む教育学的ドキュメンテーションとしての意味をもつ」と述べている。

近年、この取り組みは日本でも注目されており、ドキュメンテーションによる保育実践は、子どもの育ちと学びや評価だけではなく、保護者に対する教育・保育の意図の伝達に対するツールとして実践に基づく研究が蓄積されている[6)]。

一方、日本では、ドキュメンテーションが単なる写真付きの記録や、写真入りのクラスだよりとして展開されている実態があると指摘されている[4)]。このことから、ドキュメンテーションは、一般的な記録としての書類ではなく、教育・保育においては、特別な意味を含んでおり、本質的な意味を踏まえて、自覚的に使用していくことが求められている[4)]。

本来、教育・保育への実践従事とは、その単回の実践報告による評価で完結されるべきものではなく、子どもの育ちを中心に大人が協働して支え合う地域活動の一環として位置付けられるものでもあろう。上述のように、ドキュメンテーションもまた、子どもと大人が教え合い、学び合うために用いられるべきツールであるとしたときに、日本でのその活用の効果は十分に検証されているとは言い難い。

本研究では、保育活動をドキュメンテーションとして視覚化して保護者に示した実践例を素材として、その保育実践上の意義について検討する。ここで素材とする実践例は、子どもの感動体験の積み重ねにより、地域への愛着を育むことをねらいとした保育活動（以下、「体験隊活動」）である。体験隊活動における子どもの様子をカラー写真で示し、その学びの姿をドキュメンテーションとして視覚化し、保護者に新聞を発行した。新聞を子どもが家庭に持ち帰り、保護者に伝えることで、親子で感動体験を共有してもらうことを意図とした。

以上の体験隊活動の実践およびその活動についてドキュメンテーションを介して保護者に示すことの教育的意義について検証することを目的とした。

Ⅱ　方法

1．調査方法

体験隊活動の実践およびその活動内容についての評価を得るため活動開始から２年目の2016年２月に無記名による自由記述式の質問調査を保護者に依頼した。質問調査用紙は、調査の依頼が記述された園だよりとドキュメ

ンテーション（新聞）を同封して配布した。

調査対象は、体験隊活動に参加した３歳以上児クラスに在籍する園児193名（３歳児68名、４歳児66名、５歳児59名）に対して、各家庭に一部を配布し、計176名の保護者とした。

調査は、「体験隊活動の様子を新聞でお伝えしてきました。新聞を見ていただいたご意見・ご感想を自由にご記述ください。」といった質問内容に対して、保護者から自由に記述をしてもらった。

１）地域の概要

本実践は、長野県豊丘村の公立保育所で行われた。豊丘村は、長野県の南部に位置し、南アルプスや伊那山脈、中央アルプスを仰ぐ山村である。日本一とうたわれる河岸段丘の地形を生かし、下段は水田、中段は果樹、森林にはまつたけが発生し、品質・収穫量共に日本トップクラスである[7]。村内には、３箇所の公立保育所があり、満11か月から入所が可能であり、216名（2020年６月現在）の児童が施設を利用している。

２）体験隊活動の概要

豊丘村の保育目標は、「豊かな自然の中で、一人一人が生き生きと生活できる」である。上記の目標と５つの下位目標を念頭においた保育実践を行っている。

近年、幼児の実態として「幼児期の感動体験が減っているのではないか。」といった保育者から多数の意見が挙げられた。そこで、保護者支援・地域交流も考慮し、体験隊活動を2014年度から、保育所に在籍する幼児の感動体験の促進をねらいとして活動を立案，開始された。心身の健やかな成長と豊丘村の自然を大切にし、この風景、地域を守り住み続けていきたいという想いを育むために月に１回実施されていた[7]。

主な事業内容として、農産物（収穫・食・クッキング・生産者交流・植物学）では旬を感じ喜びのあふれる食を体感する事へも力を注いだ。文化財（史跡・昔話・伝統行事の復活・紙芝居の製作）では地域の方に講師をお願いし、地域の資源を活用しながら、子どもたちに多様な経験を通して、興味・関心を育んでもらえるように３歳以上児を対象として活動内容が計画されていた[7]。

３）ドキュメンテーション

体験隊活動を開始した２年目の2015年度からドキュメンテーションが開始された。体験隊活動の実施日には、カラー写真を使った新聞を即日に発行し、保護者に伝えることで、親子で感動体験を共有できるように努めた。

共有した感動体験は、豊丘村への郷土愛と体験を通じた親子の関わりを増加させるものと考え、地域住民の方と共に育つ子ども、地域においては子どもの姿が活性化のきっかけとなることを期待した。本実践で保護者に配布されたドキュメンテーションの一例を写真１に示した。

写真１　体験隊活動のドキュメンテーション（一例）

２．分析の方法

自由記述の回答データを分析対象とした。自由記述から得られたデータファイルに含まれた単語とその頻度を求めるため、テキストマイニング用のソフトウエアであるKH Coder（Ver. 3. 0）[8-10]を利用した。

KH Coderとは、樋口（2004）が開発した計量テキスト分析ができる分析ソフトである[8-10]。本研究においては、分析が恣意的になる可能性を回避すること、カテゴリー生成や抽出語間との関係について、客観性を確保することとした。上記の理由から、自由記述データの分析に対して、KH Coderを使用した。

語彙頻度だけではなく、語の出現パターンの似通った語の組み合わせにどのようなものがあったのかを探索するために、共起ネットワーク図を作成し、共起語のつながりを可視化した。

共起ネットワーク分析においては、共起関係の強さを測る手法としてJaccard係数、コサイン係数、ユークリッド距離が存在する。この中で、本研究ではJaccard係数を採用した。計量テキスト分析においては、Jaccard係数が用いられることが多く、KH Coderでも標準の手法となっている。共起ネットワークの解釈可能性を考慮し、描画する共起関係（edge）の強さを示すJaccard係数は、0.2以上とした。

３．倫理的配慮

調査、結果の公表については、所管課長の決裁承認により実施した。保護者へは、あらかじめ研究の主旨と目的、調査方法、結果の公表についての説明を文章にて行った。

その際、研究協力は任意であり、協力しない場合においても不利益は生じないこと、無記名回答であること、園名は公表されるが、個人のプライバシーは保護されることを記述した。質問調査への参加の同意は、質問調査用紙の提出をもって同意が得られたものと判断した。

尚、幼児の写真掲載については、調査用紙とは別に、承諾の依頼文章と公表する写真を同封し、幼児の保護者に依頼を行った。その結果、すべての保護者から、許諾を得ることができた。

Ⅲ　結果

１．抽出された頻出語

保護者に対する質問紙調査により、98名（回収率55.7％）から回答を得た。自由記述データを分析対象とし、前処理を実施した。その結果、総抽出語数は2704、異なり語数449、文が155抽出された。

複合語の出現数が最も多かったのは、「体験」（出現数59）であった。体験隊活動に関わる回答の概要を把握するため、抽出された150語彙から出現回数3以上の語彙を表１に示した。

２．共起ネットワークによる共起語の可視化

KH Coderによる共起ネットワーク図を図１に示した。共起ネットワークとは、出現パターンの似通った語を線で結んだものである。語の付置よりも線で結ばれているかどうかで共起関係が示される。

共起ネットワークから、６つのカテゴリーが示され、KWICコンコーダンスを用いて文脈を確認した。その結果、それぞれのカテゴリーは、「Ⅰ．コミュニケーションの促進と豊丘村の再発見」「Ⅱ．豊かな自然への関心」「Ⅲ．園独自の経験」「Ⅳ．地域資源の認識」「Ⅴ．有意義な体験」「Ⅵ．生活の様子と保育内容の理解」と命名された。

１つ目のカテゴリーである「Ⅰ．コミュニケーションの促進と豊丘村への愛着」は、体験隊実践の全体像を示していた。媒介中心性である「体験」の語と関連して、「話す」「親」の語が起点となり、４つの小カテゴリーから

表１　自由記述の回答に関する抽出語と出現回数

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
体験	59	行く	8	自分	5	採る	3
子ども	40	場所	8	狩り	5	収穫	3
親	22	新聞	8	食べる	5	色々	3
家庭	20	普段	8	友達	5	触れ合う	3
知る	19	たくさん	7	計画	4	親子	3
話す	17	先生	7	参加	4	羨ましい	3
豊丘	15	多い	7	続ける	4	素晴らしい	3
行ける	14	保育園	7	地域	4	村内	3
良い	14	様子	7	分かる	4	他	3
連れる	13	一緒	6	豊丘	4	大事	3
経験	12	家族	6	園	3	大切	3
楽しい	11	楽しみ	6	楽しむ	3	大変	3
思う	11	貴重	6	嬉しい	3	聞く	3
自然	11	見る	6	機会	3	聞ける	3
村	10	住む	6	季節	3	歩く	3
いろいろ	9	喜ぶ	5	栗	3	遊ぶ	3
活動	8	帰る	5	見れる	3		
教える	8	行う	5	幸せ	3		

構成されていた。KWICコンコーダンスにより文脈を確認すると、「親が体験させてあげられないことを話す」「子どもが喜び、家族にも話してくれる」「体験隊の新聞で豊丘を知るのが毎回楽しみ」「先生方とも話ができるので続けてもらいたい」「親が知らない場所を知ることにつながる」等の記述が確認できた。このことから、体験隊実践が家庭でのコミュニケーションの促進につながり、保護者自身が豊丘村を再発見することにつながっていることが示されていた。

２つ目のカテゴリーである「Ⅱ．豊かな自然への関心」は、「多い」の語が起点となり、「良い」「豊丘」の語が関連していた。KWICコンコーダンスにより文脈を確認すると、「自然の多い地で四季を感じる」「知らないところも多いので豊丘の自然の多さに関心がもてる」等の記述が確認できた。自然の多さや四季の移り変わりのなかでの子どもの体験に対する満足感や親自身の自然に対する関心が示されていた。

３つ目のカテゴリーである「Ⅲ．園独自の経験」は、「行ける」と「行う」の語が関連していた。KWICコンコーダンスにより文脈を確認すると、「親が連れていくことのできないところへ行ける」「家庭ではできない体験を行うことができる」等の記述が確認された。保護者が連れていくことができない場所や知らない場所での活動に対して、就学前教育の特質を生かした体験であることが示されていた。

４つ目のカテゴリーである「Ⅳ．地域資源の認識」は、「住む」と「自分」の語が関連していた。KWICコンコーダンスにより文脈を確認すると、「豊丘に住んでいても知らないところばかりで驚く」「村外出身なので、

自分の住むところ以外のことを知れる」等の記述が確認された。保護者自身が居住する地域について、これまで知らなかった身近な場所に豊かな資源が存在することを認識したことが示されていた。

５つ目のカテゴリーである「Ⅴ．有意義な体験」は､｢たくさん｣｢帰る｣｢貴重｣｢思う｣の語が連結していた。KWICコンコーダンスにより文脈を確認すると、「貴重な体験がたくさんできる｣｢子どもにとって貴重な体験で、思い出になっている」等の記述が確認された。帰宅後の子どもとの対話からも自然体験が子どもにとって貴重な体験であることが示されていた。

６つ目のカテゴリーである「Ⅵ．生活の様子と保育内容の理解」は､｢様子｣｢友達｣｢活動｣の語が起点となり、複数の語が関連していた。KWICコンコーダンスにより文脈を確認すると、「楽しい活動の様子が見られて、友達や先生の姿を見ることができる」「地域の人との交流やお友達との様子を見ておばあちゃんが喜んでいた」等の記述が確認された。ドキュメンテーションを見ることで、日頃見られない子どもの様子や子どもが楽しく活動する保育内容への理解が示されていた。

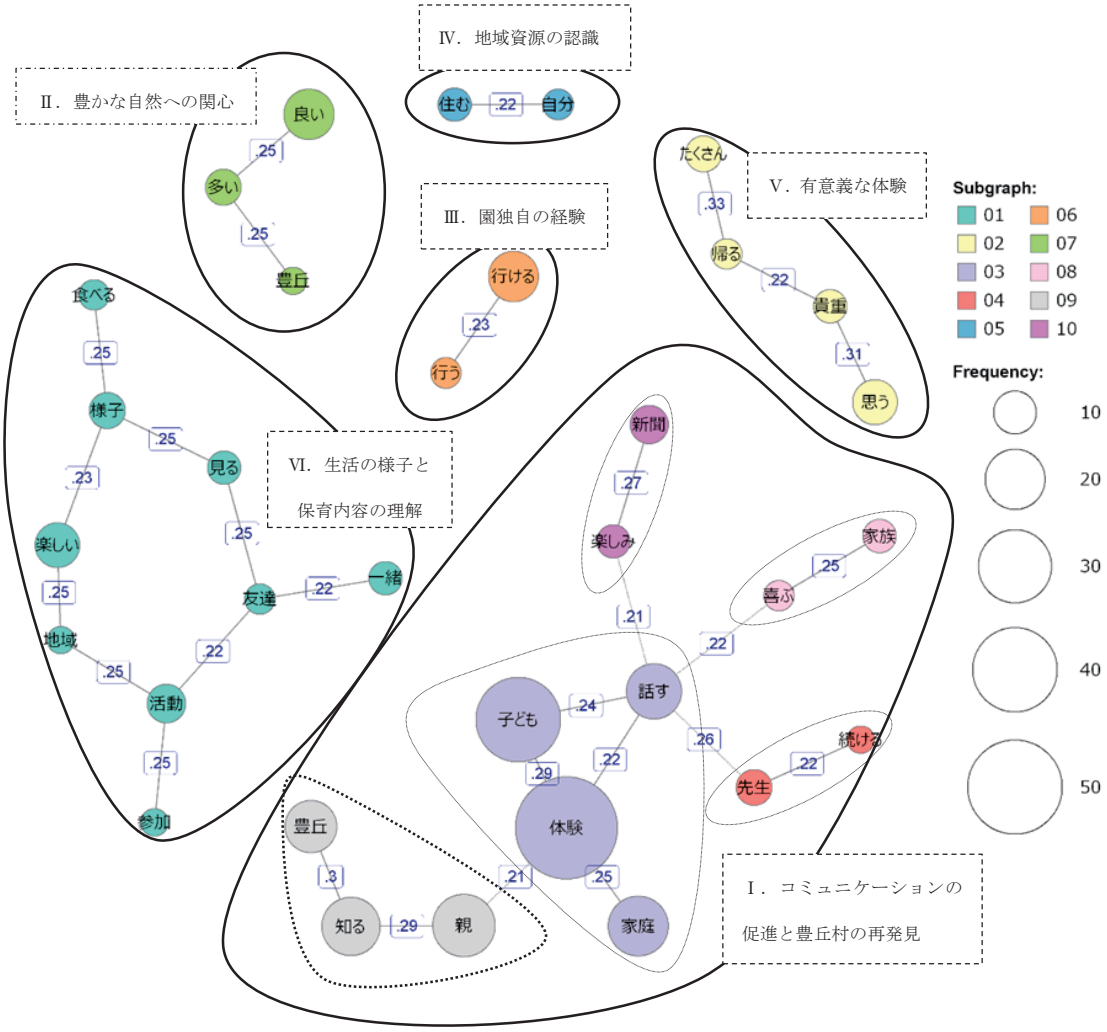

図１　体験隊による保護者の回答の共起ネットワーク図

Ⅳ　考察

１．ドキュメンテーションにより可視化されたもの

本研究は、地域への愛着を育むことをねらいとした体験隊活動を、保護者と共有し、体験隊活動の実践およびその活動についてドキュメンテーションを介して保護者に示すことの教育的意義について検証することが目的であった。

保護者からの回答の分析から、体験隊活動への意見と感想として、「Ⅰ．コミュニケーションの促進と豊丘村の再発見」「Ⅱ．豊かな自然への関心」「Ⅲ．園独自の経験」「Ⅳ．地域資源の認識」「Ⅴ．有意義な体験」「Ⅵ．生活の様子と保育内容の理解」の６つのカテゴリーが示された。

保護者の回答から、体験隊活動は、ドキュメンテーションを介して教育・保育のねらいと内容が保育者に伝達され、子どもと保護者のニーズを反映した保育活動であったと考えられる。これまでの実践研究では、保育実践の可視化により、家族内の会話の促進、子どもの生活を支える価値観の共有、保護者が保育者に対して肯定的な意識の変容を生むといった知見が示されていた[11)]。本実践においても、「Ⅰ．コミュニケーションの促進と豊丘村の再発見」「Ⅲ．園独自の経験」「Ⅴ．有意義な体験」「Ⅵ.生活の様子と保育内容の理解」といったカテゴリーが抽出され、上記の研究結果を支持する結果であった。

また本実践は、子どもに地域への愛着を育んでもらうこともねらいの一つであった。カテゴリーとして抽出された「Ⅰ．コミュニケーションの促進と豊丘村の再発見」「Ⅱ．豊かな自然への関心」「Ⅳ．地域資源の認識」は、ドキュメンテーションにより、保護者が地域の良さを発見する媒体として有効であったと考えられる。この結果は、本研究から独自に見出された知見であり、村が保有する地域の資源を生かした保育活動の展開、それに着目した子どもの姿を可視化したことの効果であると考えられる。

本実践により、保護者はドキュメンテーションを通して子どもが親しんだ地域の資源を認識し、家族で共有していることが示唆された。それにより、地域への親しみを感じたり、家族で豊かな体験をしたりするきっかけとなったと考えられる。このことからもドキュメンテーションは、保育所が求められている地域の社会資源の積極的な活用や保育所の特性を生かした子育て支援につながるものであると言えよう。

さらに、保育所保育指針では、保育所を利用している保護者に対する子育て支援として、保護者の子育てを自ら実践する力の向上に寄与する取組を促進すること、保育活動に対する保護者の積極的な参加について明記されている。ドキュメンテーションを活用した保護者への保育活動の伝達は、保育活動による子どもの姿の結果だけではなく、活動過程における子どもの姿を保護者が知るツールであった。こうした保育活動の透明化は、保護者が子どもについての理解を深めたり、子どもの新たな一面に気が付いたりすると考えられる。このことは、子どもと保護者の関係の育ちや安定につながるものであり、子どもの生活の連続性の観点からも、保育活動に対する保護者の積極的な参加と日頃の保護者の子育てを実践する力に影響を与える可能性がある。

本研究では、ドキュメンテーションが保育活動に対する保護者の理解を促したことからも、保育所保育指針が求める子育て支援として寄与したと推察される。

２．ドキュメンテーションによる相互性の活性化

今回対象とした活動についての保育評価としては、体験隊活動は子どもと保護者のニーズを反映した保育活動であり、保育のねらい

に即した保育内容であったと評価できる。一方、保育そのものの目的としては、子どもの感動体験の積み重ね、地域への愛着を育むことを実践するためには、ドキュメンテーションから得られる子どもの姿から、「その子がその子としての有能さを発揮している瞬間、驚きや喜び[5)]」といった着眼点により、記録を基に保育者同士が継続的に相互の対話を重ねていくことが目指される。ここでの「保育者同士の対話」とは、保育所に従事する保育者同士の連携だけではなく、本来的には保護者を含む子どもの育ちを支える者同士の対話という意味を含むべきであると考えられる。

本研究で得られた保護者による自由記述回答（表１）の上位、およびKH Coderによる共起ネットワーク図（図１）からは、「体験」「子ども」「親」「家庭」「話す」といった語が頻出していることがわかる。上記のことは、体験隊活動のねらいであった「幼児期の感動体験」の醸成が、子どもや同行した保育者にのみ生起しただけでなく、保護者の声としても共有されていることが示唆される。出現頻度下位に散見される「嬉しい」「羨ましい」「素晴らしい」「大切」「大変」などの保育所での取り組みへの評価的なニュアンスのある語に比べ、「体験」「知る」「経験」「自然」といった子ども自身の視点を同じくしてこそ表現される言葉の頻出は、ドキュメンテーションの提示により保護者と子どもが体験隊活動での体験を共に味わうこと、あるいは家庭での保護者と子ども間においても体験隊活動についての対話の生起が伝播していることが期待できるのではなかろうか。

体験隊活動が保育所の活動として定着した今だからこそ、活動が各回の活動として完結するのではなく、子どもの姿からの新たな保育内容の構想に展開していくことが求められる。保育活動の保育者間での共有は、ドキュメンテーションによる記録の蓄積とそれに基づく保育者同士の対話のみならず、これからの豊丘村の地域保育の活性化とそこで目指される子どもの姿を新たに創出していく方向に繋いでゆく必要があると考える。

３．本研究の教育的意義と今後の課題

本研究は、長野県豊丘村の公立保育所で行われた体験隊活動を、保護者と共有し、保護者からの感想を分析することにより、ドキュメンテーションを介して保護者に示すことの教育的意義について検証することが目的とするものである。

本研究の教育的意義は、どこにあるのであろうか。このことを考察していくために、まず体験隊活動のドキュメンテーションを作成するという実践の結果からその意義を考えてみたい。

従来の教育・保育実践の記録は、文字情報を主とするものがほとんどであったといえよう。授業や保育の様子をビデオで撮影することももちろんあったが、それは、会話の記録を文字の記録として残すために活用することを目的とするものであったといえる。また、板書や授業風景、保育の風景を写真で撮影することもあったが、それは文字情報を補完するためのものであった。

一方、保育においてドキュメンテーションを活用するという方法は、具体的な保育活動の瞬間を写真等の映像として記録するという方法であり、映像による情報が主となるという点で、従来の文字による記録とは大きく異なっている。この特徴こそが、教育上、二つの意義を持つことにつながる。

一つは、実践を行う保育者が相互に、子どもの学びの姿を記録した映像を通すことによって、表情も含めたその時の状況を文字情報よりも共有しやすいという点である。小学校や中学校においては、授業研究の一環として、授業を他の教員にも公開し、指導案と実際の子どもの姿をもとに授業後に協議する「公開授業」というスタイルが一般化している。し

かしながら、乳幼児期の子どもを対象とした「公開保育」は、乳幼児期の子どもを保護者から預かっている幼児教育の段階では、一般化しているとは言い難い。そうであるがゆえに、ドキュメンテーションを活用することによって、保育者が相互にそこに現れている子どもの様子に基づきながら、互いの保育について語り合うことが可能となってくるのである。本研究では、上記のような保育者が相互に評価を行うことまでは行っていない。このことからも、保護者からの評価と同様に、保育者が相互に語り合うことによる保育の質の向上に対する評価も必要であろう。

もう一つは、作成したドキュメンテーションを保護者に公開することは、「社会に開かれた教育課程」を実現することにつながるという点である。平成29（2017）年に改訂された小・中学校の学習指導要領や幼稚園教育要領では、改訂の趣旨を実現するために、各学校で編成する教育課程の意義と役割が、従来以上に強調されている。その上で、社会との連携及び協働により、教育課程で明確にされた育成を目指す資質・能力の実現を図っていくことが求められているとしている。

本研究における体験隊活動は、ドキュメンテーションを保護者と共有することにより、教育・保育活動の意味や意義を保護者とともに考えていくことにつながるものであり、こうしたことの積み重ねこそが、社会に開かれたよりよい教育課程・保育の計画に向けての改善がなされる方法の一つである。このことからも、今後は本実践を振り返りながら、園のカリキュラムマネジメントに努めていく必要がある。

上記のように、ドキュメンテーションによる可視化された体験隊活動を保護者と共有することによる効果について、その教育的意義を検証した。保育現場でのドキュメンテーションの活用は、従来の保育記録や活動報告としての業務以上の、保育者間、保育者と保護者間の視覚的体験共有を促進し、開かれた地域保育への展開につながる教育的意義を持つことが示唆された。

一方、本研究で示した結果は、従来から子どもの体験を重視した保育活動を行っている対象保育所の活動およびそれを了解した保護者の評価に依るものであるため、今後はさらに保育現場や地域の特性を考慮した検証や、日本の保育文化に基づく活用の可能性を模索していく必要があるであろう。さらに、ここでの相互的な保育実践の共有を保育者が、保育者の日々の実践の質的向上や専門性の涵養につなげていくための研究が求められてゆくと考える。

謝辞

本研究への主旨をご理解し、快くご協力いただきました保護者の皆様に心より感謝申し上げます。本研究の一部は、日本子育て学会第８回大会（2016年11月：東京）で発表した。本研究は、利益相反に関する開示事項はありません。また、幼児の写真（写真１）については、保護者より許諾を得て使用している。

本研究は、４名の著者により執筆を行った。第１著者の北原理恵は、豊丘村総園長として本実践の統括及び責任者である。本稿の「Ⅱ．方法の１）、２）、３）」を担当した。第２著者の齊藤勇紀は、本稿の「Ⅰ．問題と目的、Ⅱ．方法、１、２、３、Ⅲ．結果、Ⅳ．考察、１」を担当した。第３著者の中野啓明は、本稿の「Ⅳ．考察、３」を担当した。第４著者の浅田剛正は、「Ⅳ．考察、２、３」を担当した。

文献

１）汐見稔幸. トップダウンではない, 保育の質向上への議論の喚起のために. 発達. 2019; 158: 2-7.
２）山本麻美. 学びの活動を振り返るためのドキュメンテーションと幼児の造形作品と

の関わりについて. 名古屋女子大学紀要. 家政・自然編, 人文・社会編. 2018; 64: 387-395.
3）森真理. ドキュメンテーション―レッジョ・エミリアとの対話―. 発達. 2018; 156: 20-26.
4）大豆生田啓友・岩田恵子. わが国におけるドキュメンテーションの可能性に関する一考察. 子ども学. 2019; (7): 125-140.
5）秋田喜代美. なぜいま,あらためてレッジョ・エミリアか. 発達. 2018; 156: 2-7.
6）齊藤勇紀, 中野啓明, 浅田 剛正. 日本における保育・教育ドキュメンテーションの活用に関する実践研究の動向. 第11回新潟青陵学会学術集会抄録集 . 2018; 21.
7）北原理恵. 団体会員紹介　豊丘村立豊丘村保育園. 子育て研究. 2020; 10: 25-28.
8）樋口耕一. 社会調査のための計量テキスト分析 ―内容分析の継承と発展を目指して― 第2版. 京都: ナカニシヤ出版; 2020.
9）樋口耕一. 社会調査のための計量テキスト分析 ―内容分析の継承と発展を目指して―. 京都: ナカニシヤ出版; 2014.
10）樋口耕一. テキスト型データの計量的分析 ―2つのアプローチの峻別と統合―. 理論と方法 (数理社会学会). 2004; 19(1): 101-115
11）松井剛太, 片岡元子, 水津幸恵. 保育所の子育て支援におけるポートフォリオの活用 ― 保護者の記述内容の分析を中心に ―. 幼年教育研究年報. 2015; 40: 23－31.